

# キリスト教神学における歴史認識

## —ラインホルド・ニーバーにとっての歴史の意味—

Views on History in Christian Theology: Meaning of History for Reinhold Niebuhr

佐久間 重  
Atsushi SAKUMA

イエスが時代の期待を満たす救世主であるという信仰によりキリスト教の共同体が出てきた。キリスト教信仰では、生きた人物としての、そして語り継がれた人物としてのイエス・キリストにおいて、歴史の意味、神の王国が完成する、とされている。イエス・キリストの人生、死、復活の中で歴史に対する神の支配が明らかにされる。ニーバーは、キリスト教信仰で受け入れられる救世主はメシア待望論を拒否する救世主である、として、イエスがメシア待望論を否定する過程でキリスト教信仰が確立したことを明らかにする。ここで、ニーバーは、預言的メシア待望論をイエスがいかに再解釈したかを探り、イエスが預言的メシア待望論の伝統をどのように受容したかを明らかにする。

イエスが「人の子」として示した代理の愛は、悪に対する勝利を導く歴史上の一つの力である事を意味する。他方、歴史上の悩める奉仕者という見方は、代理の愛は歴史に於いては敗北するが、それが究極的には正しいとする認識の中では勝利する、という考えを導く。悩める奉仕者と神の代理としてのイエスは、単純な楽観論と悲観論の両方を超越する。ニーバーは、キリスト教の神を人間の不正で苦しみ、世俗の罪を自ら受け止める神と見なす。そして、歴史の抱える矛盾は歴史の中では解決されず、永遠や神の段階で解決される事になる、とする。ただ、歴史の中にある人間が自らの罪を十分に意識出来るようにするために、神の恵みは歴史の中でも表されるようになっている。メシア待望論のイエスの解釈は、二つの側面を持つ。第一は、歴史の中で正しいとされた者でも最後の審判では正しいとは限らないという事である。第二は、歴史に対する神の支配は、悪に対する神の勝利が悪者を打破する事ではなく、悪を神が引き取る事によって行われるという事である。

キリスト教信仰では、キリストにおける神の開示は、神が人間に話した最後の言葉と見なされている。贖罪という啓示は、超越的な神の恵みを現して、神の最後の言葉である。このことから、次の三つのことが出て来る。第一に、神がこの言葉を話す時、これまでは不完全であった神についての知識が完全なものになる。歴史の現実の基盤は永遠の中になければならない。この点で、歴史は意味を持つことになるが、その意味は歴史自体を超えたところを指し示す。第二に、啓示の言葉は歴史が抱える曖昧さや矛盾を明らかにする。この点で、歴史は意味を持つが、その意味が不明になると言う脅威に晒されていることでもある。第三に、神の言葉は、人生の意味に関する人間の過った解釈を正すことになる。その点で、啓示の言葉は、人間が作り出して来た文化と対立することがあり、賢いと見なされていた人間には愚かしい言葉として響くことがある。愚かしく響いても、それを謙虚に受け入れれば、人生を十分に説明した言葉になり、人間の真の知恵となる。その時は、啓示は人間の文化や知識と対立しなくなる。

キーワード：歴史の意味、歴史認識、ラインホルド・ニーバー

meaning of history ; views on history ; Reinhold Niebuhr

## I. はじめに

本論では、これまでに引き続きラインホルド・ニーバーの思想を取り上げ、彼の歴史の見方、つまりキリスト教神学者として歴史をどのように解釈しているかを紹介することにする。<sup>1)</sup> 西欧社会の中でのキリスト教の影響力は後退していると言われて久しいが、少なくともアメリカ社会ではキリスト教は依然として無視出来ない文化的力を発揮している。このことは、ブッシュ政権の政治基盤の中心となっているネオ・コン(新保守主義者)と呼ばれる人達の考え方を見れば明らかである。ここにもキリスト教社会としてのアメリカの姿が垣間見られる。こうしたアメリカ社会の根底に流れるキリスト教の教えの本質とはどのようなものなのかをニーバーの論述に従って精査して行くのが本論の目的である。

本論では、特にニーバーがキリスト教神学者として歴史の意味をどのように説明しているかを詳細に見て行くことにする。キリスト教はイエスを救世主として見なすことから始まる。神の預言者としてのイエスの生涯に人間にとっての歴史の意味を見出そうというのが、キリスト教の歴史認識の基本である。イエスもユダヤ教の預言者の伝統を受け継いでおり、キリスト教のイエスについての解釈にもそのことが反映している。ニーバーは、イエス自身がユダヤ教の預言的メシア待望論をどのように解釈したかをキリスト教の歴史の意味の解釈の糸口にしている。イエスが、預言的メシア待望論の中にある民族主義的特殊性を否定し、神の代理である自分自身が悩まなければならないことを受け入れたことの重要性をニーバーは指摘している。以下では、神の啓示が開示され、それが成就する中間として人間の歴史を捉える見方をラインホルド・ニーバーの論述に沿って詳しく紹介することにする。<sup>2)</sup>

## II. 歴史の意味の開示と成就

### 1. 預言的メシア待望論

キリスト教は、ナザレのイエスを救世主とする信仰から始まった。この救世主について、ユダヤ教の伝統の中では、主に三つの考え方があった。第一は預言的メシア待望論 (prophetic messianism)、第二は黙示録的メシア待望論 (apocalyptic messianism)、そして、第三は革命的メシア待望論 (revolutionary messianism) である。預言的メシア待望論では、メシアの到来と共に地上の神の王国が実現する、と考えられた。紀元前8世紀から7世紀にかけてヘブライ人の王国が滅亡

し、ヘブライ人が様々な困難に直面すると、メシアの到来を待つよりも、超自然的な介入による神の王国の実現を求める黙示録的メシア待望論が唱えられるようになった。しかし、苦難や迫害に耐えて神の王国の到来を待つことに満足出来ないヘブライ人は、全力を尽くして自ら苦難や敵と戦って自由を獲得すれば神の王国の到来は早められるという革命的メシア待望論を採るようになった。こうしたメシアについての考え方の変遷の中でイエスが登場することになる。

キリスト教信仰では、生きた人物としての、そして語り継がれた人物としてのイエス・キリストにおいて、歴史の意味、神の王国が完成する、とされている。イエス・キリストの人生、死、復活の中で歴史に対する神の支配が明らかにされる。ニーバーは、この見解を分析する前に、人生の意味、歴史の意味、神の支配のそれぞれの関係を明らかにする。

預言的メシア待望論では、神の支配の啓示を通じて歴史の意味が開示され、人生の意味は歴史の意味を超越する事が暗黙の理解となっている。歴史に意味が見出されなければ、歴史は人生に意味を与える事は出来ず、人間が歴史に関わる限り、人生の意味は歴史の中で出てくる。しかし、人間は歴史を超越するので、人生の意味は歴史の意味を超越する、というのである。預言的メシア待望論は、歴史的過程を超越し、同時にそれに内在する神を開示する事に焦点を当てている。人生の意味が歴史の意味を超越するということは、暗々裏に示されているにすぎない。その理由は、「神の王国」への期待の中に人生の意味が含まれるからである。黙示録は、このことを明瞭にしている。メシアの王国への期待の中で、これまでの人間が復活することになっている。人間が歴史的過程を超越することで永遠と直接的に結び付くが、これを象徴しているのが個人の復活である。

キリスト教信仰では人生と歴史の意味がイエス・キリストや十字架の中で現されたとされるが、これは、ヘレニズム的人生の解釈とヘブライ的人生の解釈とが混ざり合った結果である。ヘレニズム的解釈から、人生の意味は歴史を超越するという事が出てくる。ここでは、人生は歴史的過程から避難する事で成就される事になっている。一方、ヘブライ的解釈では、人生は歴史的過程の中で成就する、とされる。キリスト教的解釈で特徴的なのは、「人生」と「歴史」を明白に区別している事である。このために、キリスト教はギリシャ人にもユダヤ人にも受容され得る点を持つ。

イエス・キリストを期待しないギリシャ人にとっては、キリストが歴史における永遠の開示を現すということは愚かしい事になる。ギリシャ人の考えでは、人間が永遠の存在の要素を持つ限り、キリストによる永遠の開示は必要ではなくなる。キリスト教信仰では、人間と歴史との間にある逆説を受け入れる。つまり、人間は、自らの資質では永遠を理解出来ないが、永遠の開示の可能性を放棄してしまう訳ではないということである。

## 2. 預言的メシア待望論についてのイエス・キリスト自身の再解釈

イエスが時代の期待を満たす救世主であるという信仰によりキリスト教の共同体が出てきた。しかし、ニーバーは、キリスト教信仰で受け入れられる救世主はメシア待望論を拒否する救世主である、として、イエスがメシア待望論を否定する過程でキリスト教信仰が確立したことを明らかにする。ここで、ニーバーは、預言的メシア待望論をイエスがいかに再解釈したかを探り、イエスが預言的メシア待望論の伝統をどのように受容したかを明らかにする。

### 律法主義の否定

イエスが人生を解釈する基礎としたメシア待望論と、イエスの時代の律法主義とは対立したものであり、これが聖書の中で明らかにされている。メシア待望論と律法主義は、ヘブライ民族の歴史の中では相互を補完するものであった。しかし、紀元70年頃には、律法主義が預言的メシア待望論を凌駕するようになって行く。よって、イエスの考えに影響を与えた黙示録的運動は、ユダヤ教の傍系から生まれた。律法主義は、神がヘブライ人との間で十戒についての契約を結んだという考えに基づいている。その後、時の状況に合わせた戒律を積み重ねて行く事になるが、イエスはこのことが律法の元々の力を弱めた、と考えた。

律法主義への批判は、人生についての預言論的再解釈への糸口を含んでいる。律法主義への批判は、次のような点から成る。

- (1) いかなる法も歴史における人間の自由を正しく扱う事は出来ない。
- (2) いかなる法も人間の精神生活の次元にある行動の動機を正しく扱う事が出来ない。
- (3) 人間は法を悪の手段にし得るので、法は悪を防ぐ事が出来ない。

イエスとパリサイ派との対立は、預言的メシア待望論と律法主義との対立に集約出来る。近代のユダヤ思想の系譜には、律法主義的で神秘主義的な傾向はあっても、歴史主義的な傾向はない。近代のユダヤ思想の系譜の中で、メシア待望論はリベラリズムやマルキシズムとして表されている。キリスト教こそが、預言的メシア待望論の伝統を受け継いだ。それでも、キリスト教の中では律法に意味を求めようとする皮相的な側面が繰り返し出て来る。

### 民族主義的特殊性の否定

イエスが預言的メシア待望論にある民族主義的要素を排除した事は、預言的メシア待望論についての彼の再解釈の第一義ではなかったが、民族的偶像崇拜と結び付くような解釈はなくなった。

ヘブライ人とは民族的に異なったサマリア人を良い人とする話は、イエスが民族主義的なメシア待望論を拒否していることを表している。聖書の中で民族主義を否定している箇所は、バプティスマのヨハネの言葉であるが、キリスト教が最終的に民族主義的な個別主義を捨て去るのは、聖パウロが福音を異邦人に説くことを主張したときである。

### ヘブライ的メシア待望論への懐疑

預言論は、メシア待望論では適切な解答が得られない問題を提示する。預言論の究極の問題は、人間の自尊心についてである。歴史の中にある最終的な問題は、正しい者が如何にして勝利するかではなく、すべての善の中にある悪が如何にして克服されるかである。この問題は、歴史についての預言的解釈の中にある。この問題は、イエスがメシア待望論を再解釈した時に初めて解決された。最後の審判についてのイエスの考え方は、この再解釈の上での論理を良く表している。歴史は正義の者に対するメシア待望論による擁護の中で開花するように見えるが、その時に正義の者は謙遜さを持たなければならない事が付け加えられた。

最後の審判の中には、預言的メシア待望論の二つの段階、つまり純粋に道義的な段階と超道義的な段階がある。歴史における善悪の判断も出されるが、最後の審判では正義の者がいない事が示されている。メシア待望論が攻撃的であるとしてイエスが拒否した第一の理由がここにある。第二の理由は、悩めるメシアという考え方にある。「人の子は悩まなければならない」という考え方は、黙示録にある「人の子」という考え

と、イザイア記にある「悩める奉仕者」という考えの混合である。神の代理であるメシアが悩まなければならないという事は、人に代わって悩む事が歴史における意味の最終的な啓示である事を意味している。神の代理が悩む事は、歴史の曖昧さを最終的に明瞭なものにして、歴史に対する神の支配を表している。

「人の子」と「悩める奉仕者」の混合は、歴史の意味の再解釈を導く。代理の愛は、悪に対する勝利への歴史上の一つの力である事を意味する。これは、リベラル神学<sup>3)</sup>が十字架上のイエスに与えた楽観的な解釈である。他方、歴史上の悩める奉仕者という見方は、代理の愛は歴史に於いては敗北するが、それが究極的には正しいとする認識の中では勝利する、という考えを導く。悩める奉仕者と神の代理としてのイエスは、単純な楽観論と悲観論の両方を超越する。

ニーバーは、キリスト教の神を人間の不正で苦しみ、世俗の罪を自ら受け止める神と見なす。そして、歴史の抱える矛盾は歴史の中では解決されず、永遠や神の段階で解決される事になる、とされる。ただ、歴史の中にある人間が自らの罪を十分に意識出来るようにするために、神の恵みは歴史の中でも表されるようになっていく。

メシア待望論のイエスの解釈は、二つの側面を持つ。第一は、歴史の中で正しいとされた者でも最後の審判では正しいとは限らないという事である。第二は、歴史に対する神の支配は、悪に対する神の勝利が悪者を打破する事ではなく、悪を神が引き取る事によって行われるという事である。両方の側面とも、預言論にその根拠がある。

メシア待望論についてのイエスの解釈は、ユダヤ人によってイエスが拒否されるばかりでなく、イエスの弟子達の中に疑念を引き起こした。

### 終末についてのイエスの再解釈

預言や黙示録の中では、神の支配が表され、確立される終末が期待された。これについてのイエスの解釈では、神の隠れた支配の開示で歴史は頂点を迎え、また、メシアの第二の到来で歴史は頂点を迎える、とされている。そして、「悩める奉仕者」としてのメシアの最初の到来では悪魔に対する神の勝利があるが、神の究極の勝利は神の栄光の中でイエスの再臨があるまで延期される事になる。近代の神学ではイエスの到来によりメシア待望論的預言が成就するとされているが、ニーバーはこの見方を受け入れない。「人の子」

というイエスの到来がキリスト教の歴史の解釈では重要である、とする。そうすると、「神の王国」が到来中であるとの考え方をとる事が出来、歴史を「神の王国」までの中間として捉える事が出来る。

近代のリベラル神学では、歴史における愛の力が尊重されるが、ニーバーはこれに反対して、歴史から悪を追放するという希望を打ち砕くのが十字架上のイエスであることを指摘する。歴史の中の愛は苦悩する愛でなければならず、歴史は愛の法とは矛盾している。イエスは、歴史の中では善の広がりと共に、悪の増大を明らかにしている。現実の歴史を、その意味が開示されて成就するまでの中間点として捉えようと、歴史の中になる内的矛盾を歴史の当然の特質として受け入れることが出来る。つまり、人間の罪は克服しようとしても、実際には克服出来ないことが解る。ニーバーは、これがキリスト教の歴史解釈の基本であり、これが排除されたのは最近の近代的な信仰においてであることを主張する。

イエスの初期の弟子達も歴史について皮相的な解釈をした。それは、歴史を短いものと予期し、自分たちの生涯の内にパルージャ (parousia, キリストの再臨) があるという間違った希望を生み出してしまった。パルージャと言う新約聖書の中にある考えは、文字通りではなく、その深遠な意味を理解しなければならない。文字通り解釈すると、歴史の成就が一つの歴史として理解されてしまう。深遠な意味を理解しようとするれば、聖書の中の弁証法的論述を理解することが出来、意味の開示の成就の中間として歴史を捉えられる。

ニーバーは、近代のリベラルな聖書解釈の代表として、アルベルト・シュヴァイツァー (1875-1965)<sup>4)</sup>のものを取り上げる。シュヴァイツァーは、「時間は短い」ので、イエスの再臨は近いものになる、という。イエスの間もない再臨という考えは幻想である、とニーバーは言う。人間は自然の偶然性や時間の必然性を超える自由を持ち、愛の中で人と人とが調和することが、人間の究極の規範になる。しかし、人間の実際の歴史は、偶然と必然の両方に従属しているために、この有限性を打破しようとする罪深い努力によって汚されている。「時間は短い」という考えは、人間の限界や歴史の腐敗を人間にあるべきものとはしない考えである。

歴史をキリストの最初の降臨と再臨の「中間」として捉えることは、人間存在のすべての事実を照らし出すことになる。キリストの最初の降臨の後には、歴史の

部分的な意味が開示される。しかし、人間は自分の本性と矛盾し続け、キリストの純粋な愛は苦悩する愛になる。一刻一刻の時間は、人生の成就ばかりでなく、人間を死へと導く。死という事実は、人間が希望によって救われなければ、人生を無意味なものにしてしまう。人間は、イエスの再臨を象徴的に理解することで希望を抱くことが出来る。また、キリストを通じて人生や歴史を理解することで、現在の混乱や将来の危機を見渡すことが可能になる。

### 3. キリスト教信仰の中の待望されるメシア

キリストにおける神の啓示、人生や歴史に対する神の支配、人生や歴史の意味の開示などは、信仰によって理解されて完全なものとなる。よって、それらに論理的、合理的な解釈を試みても不十分なものとなる。キリストが啓示していることは、十字架上の犠牲的な死によって完全なものとなる。イエスの生涯は単なる叙事詩ではなく、キリストを待望する歴史である。キリストは待望されることがなかったならば、救世主ではあり得ない。ニーバーはこうした認識に立ち、リベラル神学を次のように批判する。リベラル神学が説く様に、キリストが自らの善良さで神の善良さを象徴したとしたら、キリストの啓示はそれで完結する。そして、啓示は人間の理性によって一つの歴史的事実として解釈されてしまう。しかし、人生の問題を深く分析すると、キリストの善性の投影ばかりではない。人間は有限性に巻き込まれているばかりでなく、それを超越すると言う2つの点で人生を理解することが大切である。人間の知識が増大すれば歴史の問題は解決されるとして解釈される時には、神はキリストの中に啓示されていると言うことが解らなくなる。これがリベラル神学の盲点である。

#### 十字架上のイエスの意味

キリスト教の信仰では、時代への期待はキリストにおいて成就し、神の隠れた支配は顕現され、人生の意味が成就された、となっている。これは、キリストは神の知恵であり、力であるというパウロの主張や、神の恵みや真理はイエス・キリストによって与えられたとするヨハネの主張にも現れている。キリストにおける知恵と真理は、人生と歴史に対する神の支配の目的であり、人生に意味を与えるものである。キリストこそが神のイメージであるとされるが、このことはイエスの生と死の叙事詩の中に神の力の神秘が明らかにさ

れている、ということである。ここに、人生と歴史の意味が与えられている。

神は怒りと審判を自らに課す時に、神の慈悲は一層深いものになる。そして、「人の子」(son of man)であるメシアが苦しまなければならないことは、神の受難の開示であるという信仰に繋がる。神の受難は、一方では善に対する罪の反抗の結果であり、他方では罪の結末を神の愛が自発的に受け入れたことでもある。贖罪についてのキリスト教の古典的な解釈は、父なる神は子なるキリストを人間の世界に送り、罪の犠牲にしたが、それでも父なる神の怒りはなだめられなかった、と言うものである。ニーバーは、贖罪を次の様に解釈する。神の正義と許しを一体のものとすることによって、神の最高の正義を神の愛と見なす。一方、神の正義と許しを分離することで、罪の深刻さが十分に知らなければ神の慈悲の深さが解らないことも明らかにする。

罪は神に苦悩をもたらすということを知ることが、罪の深刻さを示すことになる。このことを知って人間は絶望するのであるが、この絶望がなければ神の許しをもたらす悔い改めへの道が閉ざされる。この悔い改めの中で人間は自らが置かれている状況を十分に理解し、絶望を克服する。この経験の中で人間は自らの有限性を理解する。人生に対する神の支配についてのこの様な開示は、理性によって理解される真理ではなく、信仰によって把握されるものである。

#### 神の知恵と力

##### (1) 知恵と力の特性

キリスト教信仰では、十字架上のキリストを通じた神についての知識は、「知恵」(wisdom)と「力」(power)であり、「恵み」(grace)と「真理」(truth)であるとなっている。贖罪という真理が心の中で得られる時、「力」と「恵み」としてのキリストを各個人は心に抱く。その時、絶望や過った希望が克服され、人は平穩で創造性のある生活を送れるようになる。

ギリシャ的伝統の中のキリスト教信仰では、贖罪を理性で解釈した。そのため、知恵と力との関係が理解できなかった。ギリシャ人にはキリストは期待されていなかった。その理由は、歴史が自然の連続と見なされていたので、神が歴史の中で自らを現すことは不可能だと考えられたからである。また、各々の人間の理性は各々の人間にとってのキリストと同様であったので、神が自らを歴史の中に現す必要がなかったからで

ある。

福音がギリシャ人に教えられた時、有限性と永遠性との間の問題を解こうとして、ギリシャ人は福音から真理を得ようとした。ギリシャ人は有限性と永遠性との間の問題を合理的には答えられないとして、キリスト教の福音にその解答を求めた。その結果、次の二つのことがもたらされた。第一に、永遠が歴史の中に現されるというキリスト教の教えをギリシャ人が受け入れたことである。ただ、贖罪という概念を理解していなかった。このことは、以降のヨーロッパ人の中にも残った。第二に、「知恵」と「力」との関係をギリシャ人が形而上学的に解釈しようとしたことである。神はキリストの受肉の中で自らを歴史の中に現したという信仰によって理解されるべき事柄を、人間の知恵という真理に変質させたことである。このことは、ニケーアの信条<sup>5)</sup>やカルケドンの宗教会議<sup>6)</sup>の中にも現れている。

人間的な特性を持ちながら、一方で神的な特性を持つという、キリストが持つ二つの本質をギリシャ人は実在論として解釈した。そのため、象徴的にしか現せない信仰上の真理が、思考上の理性の真理に変質させられた。このようにして、キリスト教の信仰が、心の中で理解される必要のない形而上学的な真理に還元されてしまったために、「知恵」と「力」との間の関係が曖昧なものになった。人間の不安は絶望に達する程には高められなくなった。絶望から悔い改めが生まれ、悔い改めから信仰が生まれ、この信仰の中で人生の新しさ、つまり「力」が出てくるが、このことが曖昧になった。

## (2) 人間の「知恵」

キリスト教信仰では、人生の意味の成就よりも、キリストによる人生や歴史や神の開示に一層の確信が与えられているが、「力」や「恵み」については曖昧なところがある。これをニーバーは、次のように説明する。神の「恵み」は人間の未完成さを正す神の「力」である一方、人間の罪を克服する神の慈悲深い「力」である。この「恵み」を知ることが人間の真の「知恵」となる。キリスト教信仰によると、歴史の成就是二つの側面を持つ。一つは、人間が信仰により神との関係を確立する瞬間に成就があるとするものであり、もう一つは、歴史の成就是人間が待たなければならないものとするものである。

## (3) 贖罪の意味

聖パウロによると、「十字架上のイエス」によって現された真理は、人間よりは賢い神が示した愚かさとして定義される。この愚かさは、神の「力」と「知恵」になる。十字架によって現された真理は、人間の文化の中で予期されるような真理ではなく、人間の知恵の開花でもない。しかし、人間がキリストを受け入れた時には、キリストの中に具現された真理は、人間の新しい知恵の基礎になる。

信仰によって理解された真理は、賢い人間が経験から引き出すようなものではない。他方、信仰の真理は、経験と矛盾するものではない。信仰の真理は、経験によって有効なものにされる。人間の自己超越の能力が神へのあこがれを生み出したりする一方、間違った神への崇拜を導いたりする。それでも、人間の真理が完全に腐敗することはなく、真実の知恵を求める願望は残る。これが、悔い改めの中で出て来る「残余の徳」である。悔い改めが信仰の真理を有効として、信仰の真理を神の「力」に変える。

ニーバーは、悔い改めと信仰という循環関係を捉え、神の「恵み」を自然が完結したものと見る視点と、神の「恵み」を自然とは対立するものとする視点の両方を部分的には正しいものとみなし、人間が真実の知恵を求める「本来的正義」という「残余の徳」により人間は神との接点を持つことになるとした。これについては、カール・バルト(1886-1968)<sup>7)</sup>などの急進的なプロテスタント神学者は否定的であり、ニーバーの見解とは異なっている。

神の開示を理解することで得られる真理と、人間が自分の経験から引き出す真理との違いは、人間がいかにか他人を理解するかを考えてみると明瞭になる。他人に対する理解は、まず対象となる人を観察することを基礎にして、次に観察者たる自分の人間性の深みに応じて行われる。他人が自分に話しかける言葉によって、その人の人間性の深みを理解することが多い。他方、観察者の人間性によっては、他人の人格を過って理解することもある。信仰によって得られる神の開示と、隠れた神について人間が持つ知識は、他人を理解するのと同じようなことである。

キリスト教信仰では、キリストにおける神の開示は、神が人間に話した最後の言葉と見なされている。贖罪という啓示は、超越的な神の恵みを現して、神の最後の言葉である。このことから、次の三つのことが出て来る。第一に、神がこの言葉を話す時、これまで

は不完全であった神についての知識が完全なものになる。歴史の現実の基盤は永遠の中になければならない。この点で、歴史は意味を持つことになるが、その意味は歴史自体を超えたところを指し示す。第二に、啓示の言葉は歴史が抱える曖昧さや矛盾を明らかにする。この点で、歴史は意味を持つが、その意味が不明になると言う脅威に晒されていることでもある。第三に、神の言葉は、人生の意味に関する人間の過った解釈を正すことになる。その点で、啓示の言葉は、人間が作り出して来た文化と対立することがあり、賢いと思われていた人間には愚かしい言葉として響くことがある。愚かしく響いても、それを謙虚に受け入れれば、人生を十分に説明した言葉になり、人間の真の知恵となる。その時は、啓示は人間の文化や知識と対立しなくなる。

### Ⅲ. おわりに

以上、ラインホルド・ニーバーの『人間の本性と運命』第二巻第二章を中心にして、ニーバーによるイエス・キリストを介した歴史の意味についてのニーバーの見解をまとめてみた。これにより、キリスト教神学とはどのようなものなのか、また、ニーバーの神学の特徴はどのようなものなのかの一端は、紹介出来たと思う。ニーバーの論述の特徴である弁証法的特性も明らかに出来たと思う。その一つの例は、キリストの中での歴史の意味の開示を「正」とし、贖罪を「反」とし、キリストへの信仰を「合」と見なすことであると思われる。このような特徴は、ニーバーの論述のその他のところでも現れる。

今回は、歴史の意味についてのニーバーの見解が中心であるが、ニーバーの思想にはまだ十分に紹介し切れていないことが多いので、今後の課題としたい。

### 注

- 1) 名古屋文理大学紀要第4号(2004年4月)、第5号(2005年3月)参照。
- 2) Reinhold Niebuhr, *The Nature and Destiny of Man*, Vol. II (New York: Charles Scribner's Sons, 1943), pp. 25-67を参照。
- 3) 20世紀初頭に社会科学の手法を使って形成された神学で、イエス・キリストの人間性や人間の能力を強調した。文化プロテスタント主義的な色彩が強い。
- 4) フランス生まれで、神学、医師、音楽に精通して

いた。1913年以来アフリカで医療活動に尽力し、1952年にノーベル平和賞を受賞した。

- 5) 325年に第1回の宗教会議が開かれ、三位一体を正統として、キリストの人間性を主張したアリウス派を異端とした。
- 6) 451年に開かれ、「キリスト単性」を異端とした。
- 7) スイス生まれの神学者で、ニーバーの「新正統主義」(Neo-orthodoxy)に大きな影響を与えた。バルトの神学は、弁証法神学、危機神学とも呼ばれ、ニーバーよりも神の絶対性を主張していた。